

お金に対する禁忌感の意識調査：金融リテラシーに与える影響

山根智沙子（広島経済大学）・阿萬弘行（関西学院大学）・本西泰三（関西大学）

人々は、お金に対して、どのような禁忌感(規範意識)をもっているのだろうか。本稿は、大学生を対象に「金銭に対する意識」についてアンケート調査を実施し、お金に対する心理的価値観を明らかにするとともに、それらが金融リテラシーに影響を及ぼしているか否かを検証する。

近年、金融のグローバル化や金融商品の多様化など、金融サービスの高度化にともない、「金融リテラシーの重要性」はますます高まっている。個人を取り巻く経済・金融環境の変化に加えて、少子高齢化が進む日本においては、「老後の資金」という課題も重くのしかかっており、自助努力による「老後資金のための資産運用」を促す取り組みがより一層求められている。しかしながら、よく指摘されることとして、日本において、「お金の話はタブー」という風潮は根強く、家庭のなかにおいても、しばしば教育現場においても、人々は金銭についてあまりオープンに語ろうとしはしない。これらの「お金の話を避ける」という禁忌感の背景に何があるのだろうか。人前でお金の話をすることははしたない、恥ずべきことだと教えられて育ったからか、あるいは、貯蓄大国であるにもかかわらず、お金そのものを実は忌み嫌っているのか。これらは、生まれ育った風土・習慣や家庭環境によっても異なると考えられる。さらに、性別・年代、学歴や職業、社会的地位、婚姻状況など、これまでの人生経験にも大きく左右されるであろう。そこで、本稿では、まだ社会に出ていない大学生を対象に「お金に対する意識・お金に対する態度」を測るアンケート調査を実施し、①性別、②生まれ育った地域、③家庭環境によって金銭に対する禁忌感等に差異があるか否かを検証するとともに、それらの差が金融リテラシーにまで影響を及ぼしているか否かを検証した。具体的には、お金に対する心理的価値観や態度に関する既存の尺度（“Money Ethics Scale”, Tang, 1992）を計測するとともに、謝礼や奨励金など金銭をとまなう取引行動と禁忌感(モラル)に関する設問を追加しアンケート調査を実施した。

さまざまな角度から分析を試みた結果、まず、お金に対する意識のなかで「悪 (Evil)」の項目と金融リテラシーには負の相関があり、金銭に対して悪い印象を抱いている学生の方が、金融知識が低いこと、男女間に大きな差異は見られないものの、生まれ育った地域によってお金に対する意識、とりわけ「悪 (Evil)」の項目に違いがあることを見出した。次に、家庭環境を表わす変数として、両親の学歴、両親・祖父母の金融知識の有無を用いて分析したところ、とりわけ母親の学歴が子どものお金に対する意識と関係が深く、高学歴の家庭で育った学生はお金に対して好意的であることが示された。さらに、両親の金融知識の有無ではなく、祖父母の金融知識と孫である学生の金融リテラシーに正の相関がみられた。最後に、アンケート結果に対し因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ない、「お金に対する意識」に4つの共通因子を抽出した。